

身洗沢遺跡における外来系土師器の諸例

中山誠二

-
- | | |
|----------------|---------------|
| 1 はじめに | 4 山梨県下の外来系土器群 |
| 2 身洗沢遺跡出土土器の概要 | 5 まとめ |
| 3 身洗沢遺跡の外来系土器 | |
-

1 はじめに

弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての中部日本には、東海西部地域や北陸地方に特徴的な土器群が搬入・模倣され、外来系土器群と呼ばれる非在地型の土器群が一時的に顕著となる。これらの土器群の意義は、第一に各地域の土器の並行関係を知るためのタイム・スケールとしての資料的評価、第二に定型化した古墳出現の時期における外来系土器の波及の背景に特定地域からの人間集団の移動や移住を想定し畿内王権の段階的浸透をみると、といった意味理解のレベルの評価に分けられる。山梨県内においても近年それらの資料が徐々に増加しつつあるが、その編年的位置付けや古墳出現との関係について未だに不明な点が多い。

本稿では身洗沢遺跡で出土した古式土師器のなかで外来系土器と考えられる資料について抽出し紹介する中で、現段階で知られる本県の類例を探り、その時間的、空間的位置について若干の検討を行いたい。

尚、本稿での「外来系土器」とは、比田井克仁氏が指摘する様に、土器の搬入一模倣一定着の過程でこの基本的プロセスが部分的に欠如している現象が認められる土器を指し¹⁾、非在来系土器のなかでもその地域のなかではついに定着をみないものをいう。

2 身洗沢遺跡出土土器の概要

本遺跡では縄文土器や奈良・平安時代の土師器、須恵器などがわずかに出土しているが、主要な遺構での出土遺物は弥生時代後期～古墳時代前期の土器群が主体を占める。

出土地点別にみると、弥生時代後期の土器は、調査区北側の埋没旧河道を利用した水田面の第2ステージ～第4ステージ及び微高地上の1号・2号住居址で出土している。これらの土器群は同じ甲府盆地の中でも北西部に位置する敷島町金の尾遺跡の土器様相と類似し²⁾、 笹沢浩氏により甲斐型の箱清水式土器と呼称される中部高地型櫛描紋土器である³⁾。

古墳時代前期では先の旧河道第5ステージ及び3～4区のピット群や土器片を敷き詰めた路または畦畔状の遺構、小屋状の竪穴遺構などが検出され、該期の多量の土器片が出土している。これらの中には小破片ではあるが本稿で取り上げる外来系土器がわずかに混在する。

3 身洗沢遺跡の外来系土器

(1) 東海西部系パレス・スタイル壺 (第1図)

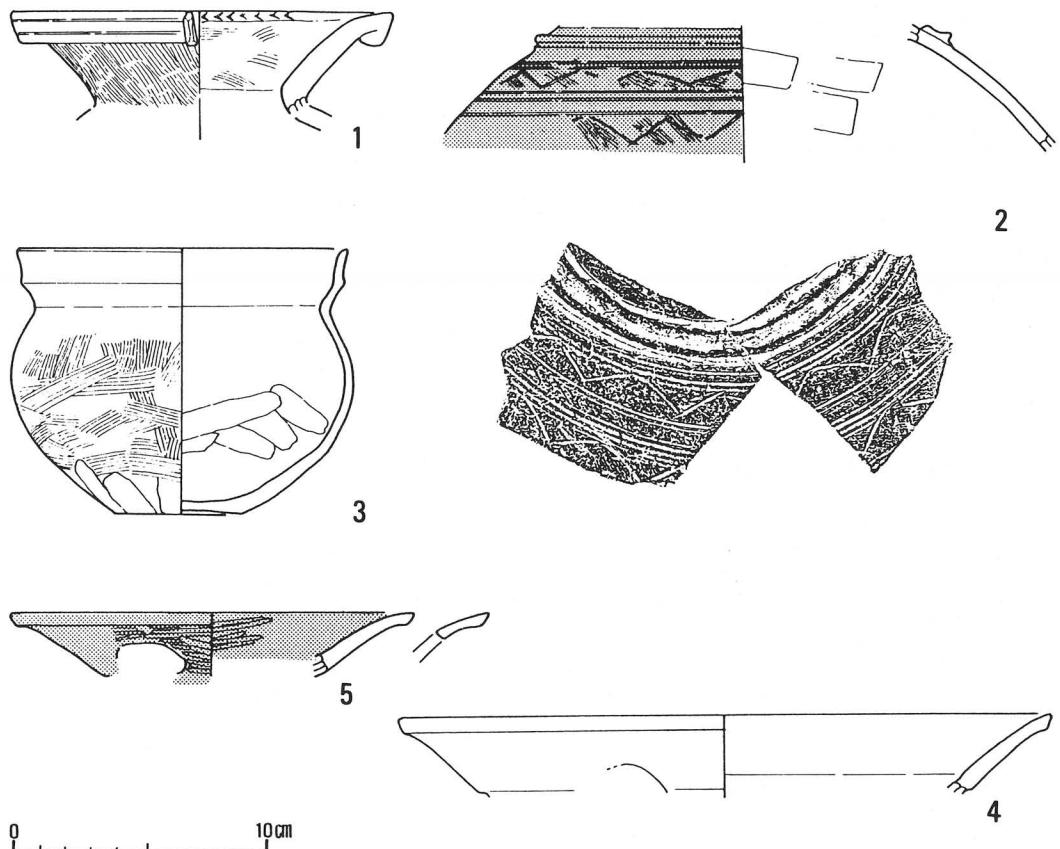
1 (No.263 以下カッコ内は報告書土器番号を表す) は、折り返しによる有段口縁を持つ壺で、口縁部に擬凹線文と棒状貼付文が見られる。口縁内部にはクシ状工具による羽状文がめぐる。外面の頸部には单斜方向のハケメが施される。口縁部の製作技法などの点でパレス・スタイルの壺 (以下パレス壺) に系譜を持つと考えられるが、口縁内部の隆帯などは見られず、形骸化した様相を示す。

2 (No.264) は、肩部に貼りつけ隆帯がめぐりその下部に横線文が3段以上めぐる赤彩壺である。平行する横線文の間にはヘラ状工具による山形文帯をもつ。器面調整は外面にハケ、内面にヘラケズリが認められ、胎土には長石、赤色粒子が含まれる。

(2) 北陸系壺と有透装飾器台 (第1図)

3 (No.167) は、幅1cm余りの直立口縁をもつ有段口縁の小型壺である。胴部最大径は胴部やや上部にあり、口径とほぼ同じ。底部は平底であるが、中央部がわずかに上げ底状を呈する。器面調整は外面下部にヘラケズリ、胴部にハケ調整、内面にヘラケズリ及び指頭痕が見られる。胎土には1mm大の石英、赤色粒子などを含む。

4 (No.262) は、口縁が外反し、口縁下で若干の段差を持つ有透装飾器台である。口縁端部



第1図 身洗沢遺跡出土の外来系土器

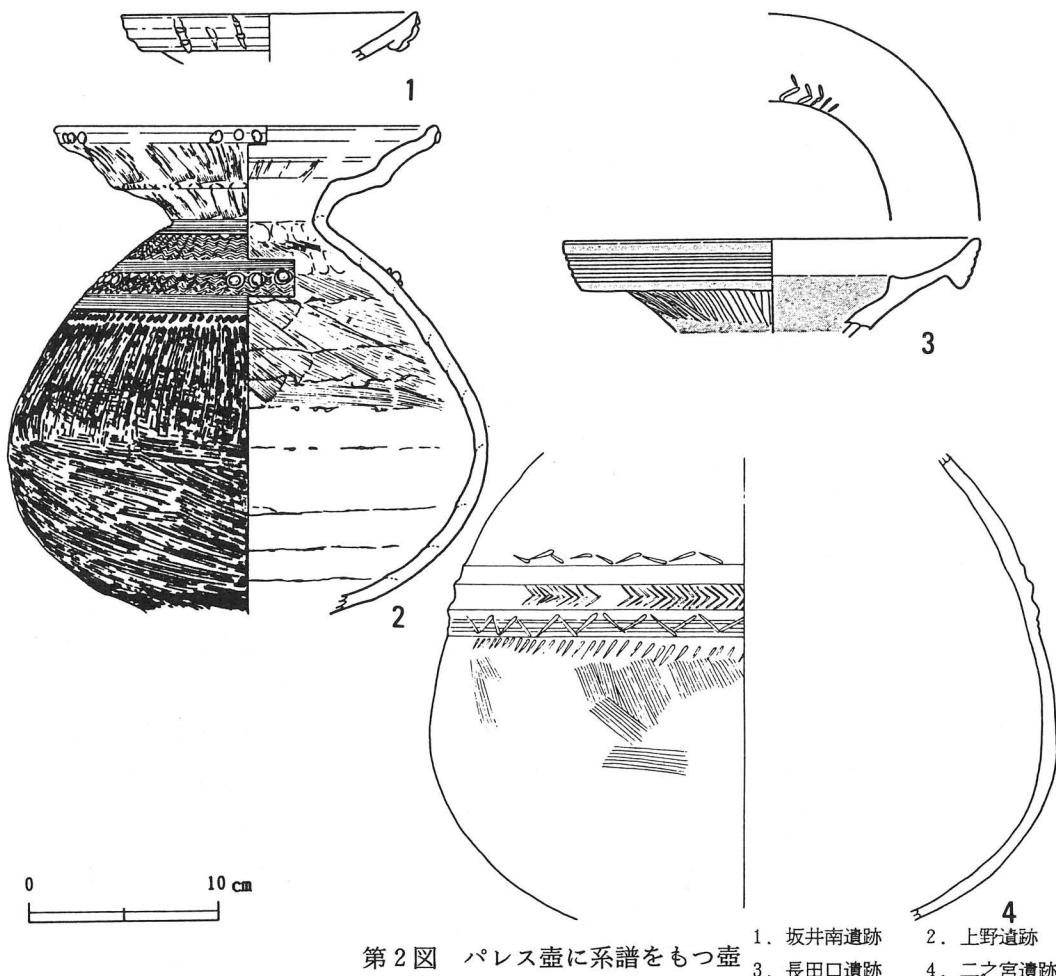
が尖り、口縁下には曲線的な透しが存在する。5 (No.285) も 4 と同じ特徴をもつ器台口縁部と考えられ、内外面に赤彩が施されている。器面調整は外面が横、内面が縦方向のミガキが認められる。

4 山梨県下の外来系土器群

(1) パレス壺

これまで山梨県内で明らかにされている資料のなかで、東海西部（伊勢湾沿岸地域）のパレス壺に系譜がたどれるものは、身洗沢遺跡を含め御坂町二之宮遺跡⁴⁾、韮崎市坂井南遺跡⁵⁾、櫛形町長田口遺跡⁶⁾、三珠町上野遺跡⁷⁾など 6 例が確認されている。

第 1 図 2 の身洗沢遺跡例と第 2 図 4 の二之宮遺跡出土壺は口縁部が欠損しているが、直線文帯と山形文帯の体部文様構成が浅井分類 E 類に含まれる⁸⁾。浅井氏の作成したパレス壺の分布図によれば、パレス壺 A～D 類は尾張平野を中心に伊勢、三河、美濃地方などに限定されるが、E 類・F 類は一挙にその分布域を広げ、摂津、大和、近江、越後、加賀、遠江、駿河、相模、武藏、上総、常陸、信濃、上野、下野などの地域に拡散する。したがって、甲斐地域での流



第 2 図 パレス壺に系譜をもつ壺

もこれらと規を一にした現象として捉えることができよう。

また、身洗沢遺跡1や坂井南遺跡16号住出土土器（第2図1）は、壺口縁部のみであるが折り返し口縁部に擬凹線文と棒状浮文をもち、身洗沢遺跡例ではさらに口縁内面に綾杉文をめぐらす。また、長田口遺跡でも口縁部に凹線文、口縁内面中位に凸帯をめぐらし、綾杉文がわずかに認められる赤彩壺が存在する（第2図3）。これらの土器は口縁部の擬凹線文化、口縁内面の凸帯や綾杉文の欠如、赤彩装飾の有無などの点で、いわゆるパレス壺の範疇から逸脱するものもあるが、祖形はパレス壺に系譜を求めることができる。このような要素の欠落は関東地方に出土するパレス壺にも多く認められ、起源地から離れた地域における模倣化過程での共通した現象の一つとして捉えることができる。

上野遺跡1号方形周溝墓出土壺（第2図2）は、体部に直線文帯と波状文帯、列点文及びボタン状貼付文を持つ赤彩壺であり、口縁部が二重口縁となる。体部文様帯は浅井分類A類の特徴を有するが、これらは尾張平野では弥生時代後期の山中式に比定されており本資料の年代とは時間的な隔たりが存在する。体部文様構成は静岡県小深田西遺跡出土壺に類似するが⁹⁾、これらの特徴は尾張平野というよりむしろ西遠江地域の該期の壺に系譜が求められると考えられる。また、二重口縁壺はこの時期の畿内系の二重口縁壺の影響を受けたもので二つの地域の要素が融合した「折衷形」¹⁰⁾土器ともいえる。

甲斐地域で出土している以上のパレス壺は、時期的に東海西部の元屋敷式と並行関係にある京原式段階に伝播されたと考えられ、その模倣の過程で文様や赤彩などの手法の欠落や他型式との融合などが認められる。この点は関東地方での外来系土器の内容と類似した状況を示すものといえよう。

(2) 北陸系壺と有透装飾器台

口縁部が5の字形を呈する北陸系の壺は、現在までのところ二之宮遺跡、坂井南遺跡、長田口遺跡などで確認されている。

二之宮遺跡では出土した遺構は明確ではないが8点の北陸系壺が検出されている（第3図1～8）。この内1点は口縁部に凹線文を施し、他は横方向のナデが主体となる。胴部はハケ調整され、肩部にハケによる刺突をめぐらすものもある。

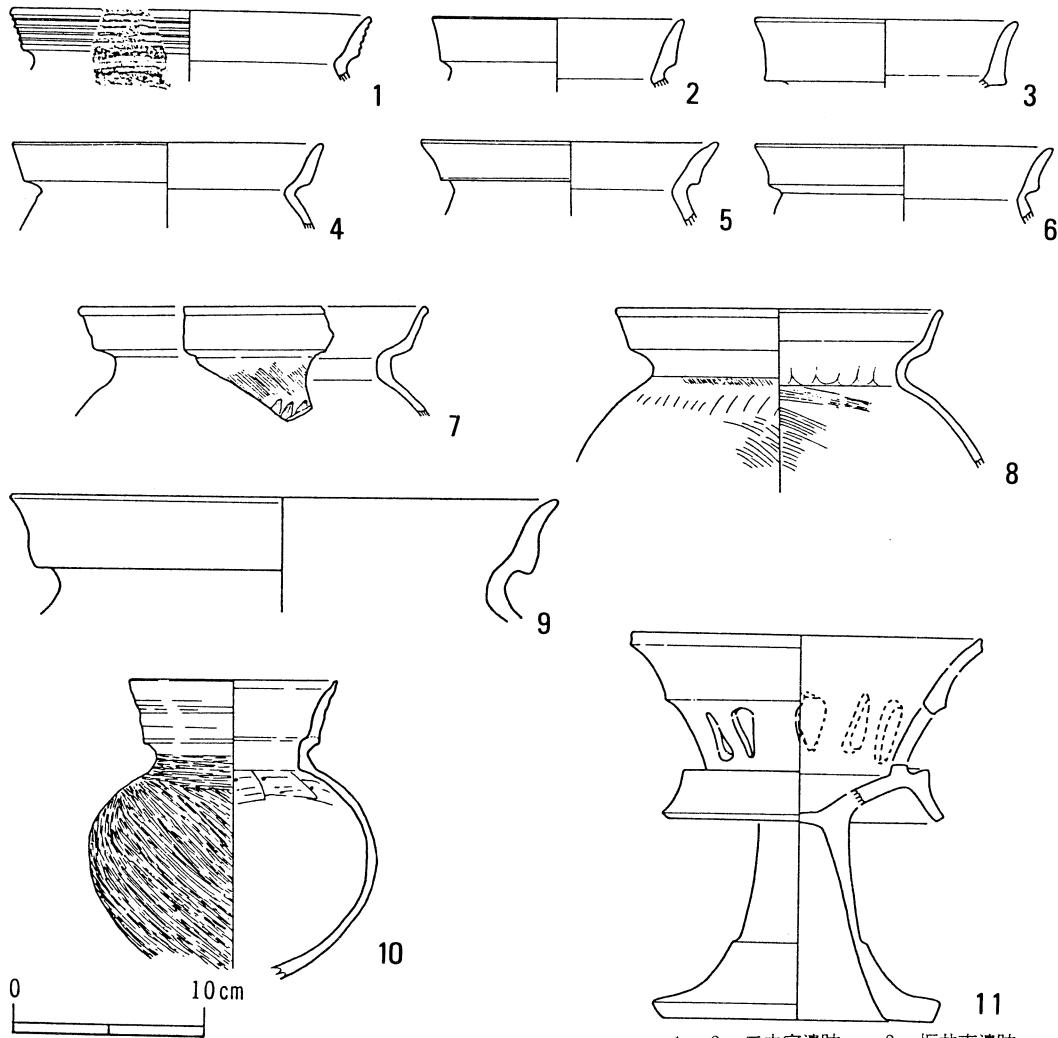
今回身洗沢遺跡で発見された第1図3は、壺というより鉢形を呈するが、口縁部の特徴はやはり北陸系の特徴を有する。近県での類例は長野県安源寺遺跡¹¹⁾、東京都神谷原遺跡S B 124¹²⁾、千葉県南中台遺跡13号住¹³⁾、栃木県萩山遺跡1号方形周溝墓¹⁴⁾などに存在する。

有透装飾器台とされるものは、身洗沢遺跡の口縁部破片2点の他に、御坂町姥塚遺跡85号住で脚部を除く上半部が出土している（第3図11）¹⁵⁾。姥塚例は、石川県北安江遺跡¹⁶⁾、近岡ナカシマ遺跡¹⁷⁾、南新保D遺跡¹⁸⁾、漆町遺跡¹⁹⁾などで出土しており、月影II式に特徴的な器台である。身洗沢例は姥塚例よりも透かしが上部に切りこみ口縁部にみられるが、口縁端部の特徴は姥塚のものに非常に近似している。

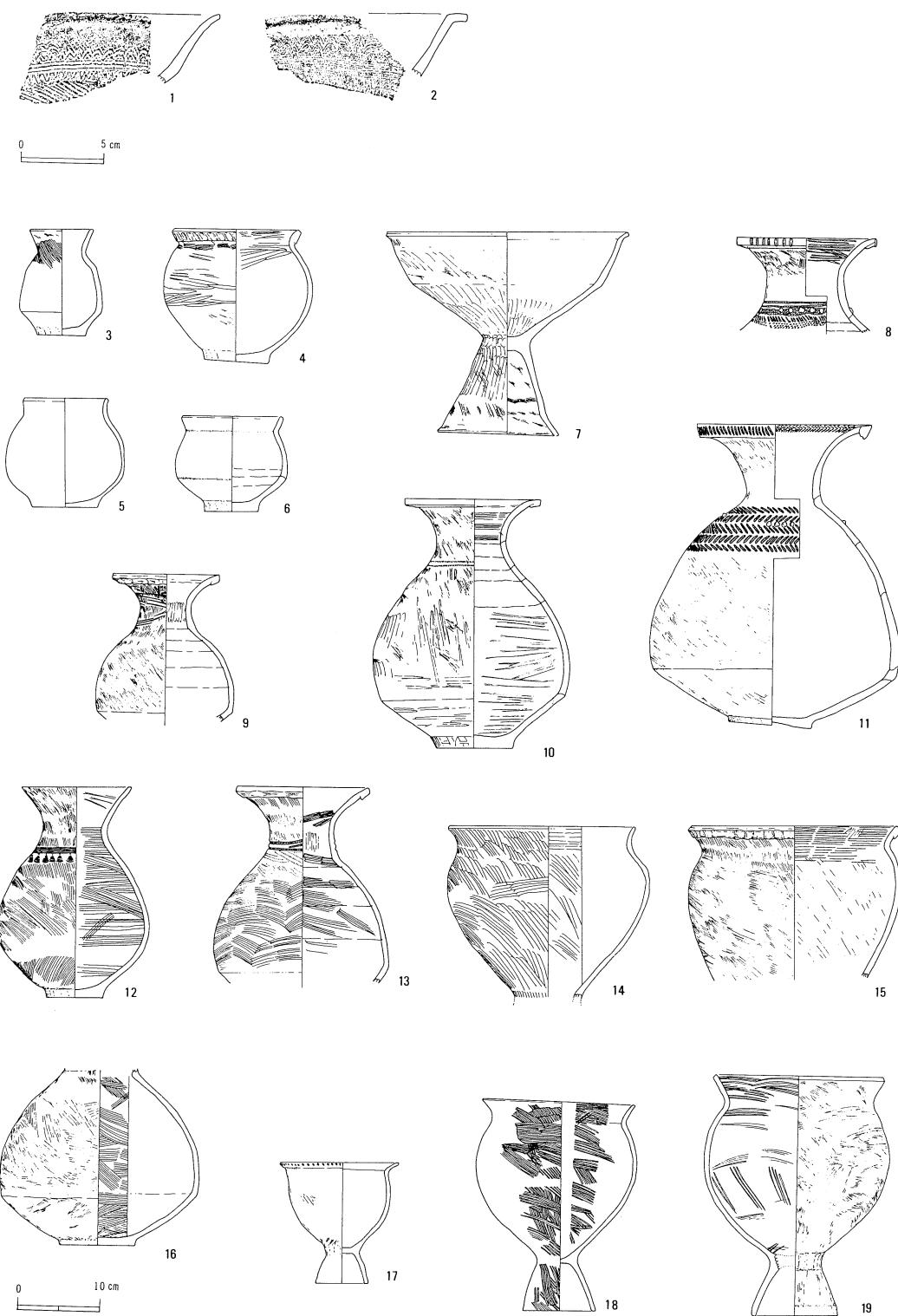
山梨県下で確認されている以上の北陸系土器は、月影II式²⁰⁾、漆4～5期²¹⁾に位置付けられ

ると考えられる。北陸地方では古府クルビ式期になると畿内系や山陰系土器群が増加し、器種構成のうえでも大きな変化が認められるとされているが²²⁾、それ以前の段階での北陸系土器の活発な動きを考えるうえで興味深い。

北陸に隣接する長野県では、花岡氏の分析によると長野地域土師器第Ⅰ期～Ⅲ期にかけて北陸系土器群が認められるという²³⁾。また、群馬県の有馬遺跡では北陸東部の新潟県との関連を示す資料が出土している²⁴⁾。さらに、関東地方では千葉県南中台遺跡²⁵⁾、大崎台遺跡²⁶⁾、栃木県萩山遺跡²⁷⁾、埼玉県志渡川遺跡²⁸⁾などでこれらの土器が知られており、該期の北陸系土器の中部、関東地方への伝播を考えるうえでも興味深い。北陸系土器の関東地方への流入については北陸東部から南下して東山道へ入り南関東にいたるルートや、一度東海地方を経由して南関東へ入るルートなどが想定されているが、甲斐への流入径路の問題もこの意味では重要な意味をもつものと考えられる。



第3図 北陸系土器 1～8 二之宮遺跡 9. 坂井南遺跡 10 上野遺跡 11. 姥塚遺跡



第4図

(3) その他の非在来系土器群

さて、(1)、(2)では身洗沢遺跡で出土した外来系土器であるパレス壺、北陸系甕および有透装飾器台について県内の出土状況を述べたが、筆者がかつて甲斐地域で古式土器の成立段階とした京原式期以前の段階での非在来系土器の動態を含めて整理してみたい。なお、土器群の様式的推移は、「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」²⁹⁾にそうものとする。

山梨県の東部地域を除く甲府盆地周辺地域では、弥生時代後期になると中部高地型櫛描文土器群を主体とする集落が目立つが、後半期には東海地方東部地域の影響を受けた土器文化が定着化すると考えられてきた。しかし、甲府盆地西部の釜無川右岸地域ではこの時期に遠江地域の土器がもたらされている。

とくに、甲西町住吉遺跡では東遠江の菊川式に類似した壺（第4図8～13・16）や西遠江の伊場式＝西遠山中式に見られるような高坏（第4図1・2）が存在する³⁰⁾。このような壺は敷島町金の尾遺跡の中でも客体的に存在が知られていることから、後期前葉から中葉にかけて信濃系と東海中・西部系の土器文化がこの甲府盆地で接触していることになる。また坏下半に稜を持つ高坏は、第五様式の影響を受けて東海地域に定着する山中式の高坏であり、その模倣化が進んだものが住吉遺跡1号住居址出土の高坏（第4図7）と考えられる。類似した山中式系の高坏は南関東でも神奈川県篠山遺跡³¹⁾、稻荷台遺跡D地点³²⁾、中原上宿遺跡³³⁾、本郷遺跡³⁴⁾、子の神遺跡³⁵⁾、東京都御所水遺跡³⁶⁾など遺跡で確認されており、欠山式の古段階のものも鎌倉市白山遺跡³⁷⁾に存在する。この白山例も住吉遺跡の高坏に類似するが、口縁部が外屈する点で後者がやや古相を示すといえる。同様の高坏は三珠町一条氏館跡遺跡などでも確認されており、少なくとも甲府盆地西南部では後期後半において定着化する土器群と思われる。

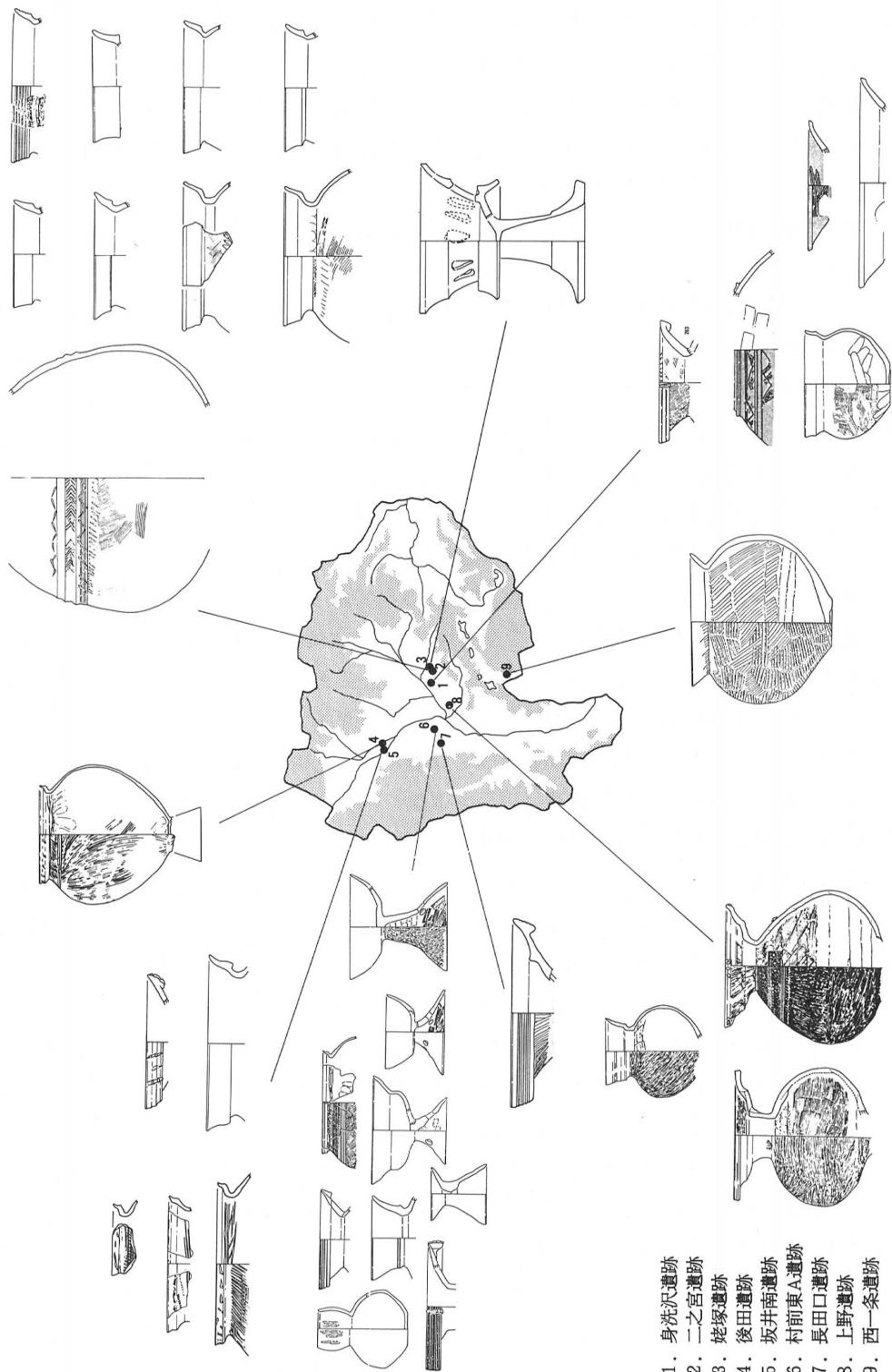
続く六科丘式期の外来系土器の出土状況は、標識となる六科丘遺跡では確認されていない³⁸⁾。しかし、この時期がS字状口縁台付甕（以下S字甕）のB・C類（赤塚分類）³⁹⁾、元屋敷式の高坏、小型精製土器群などの出現の前段階に位置付けられるとするならば、該期に欠山式並行の東海系土器が出土しても編年的な矛盾は生じない。

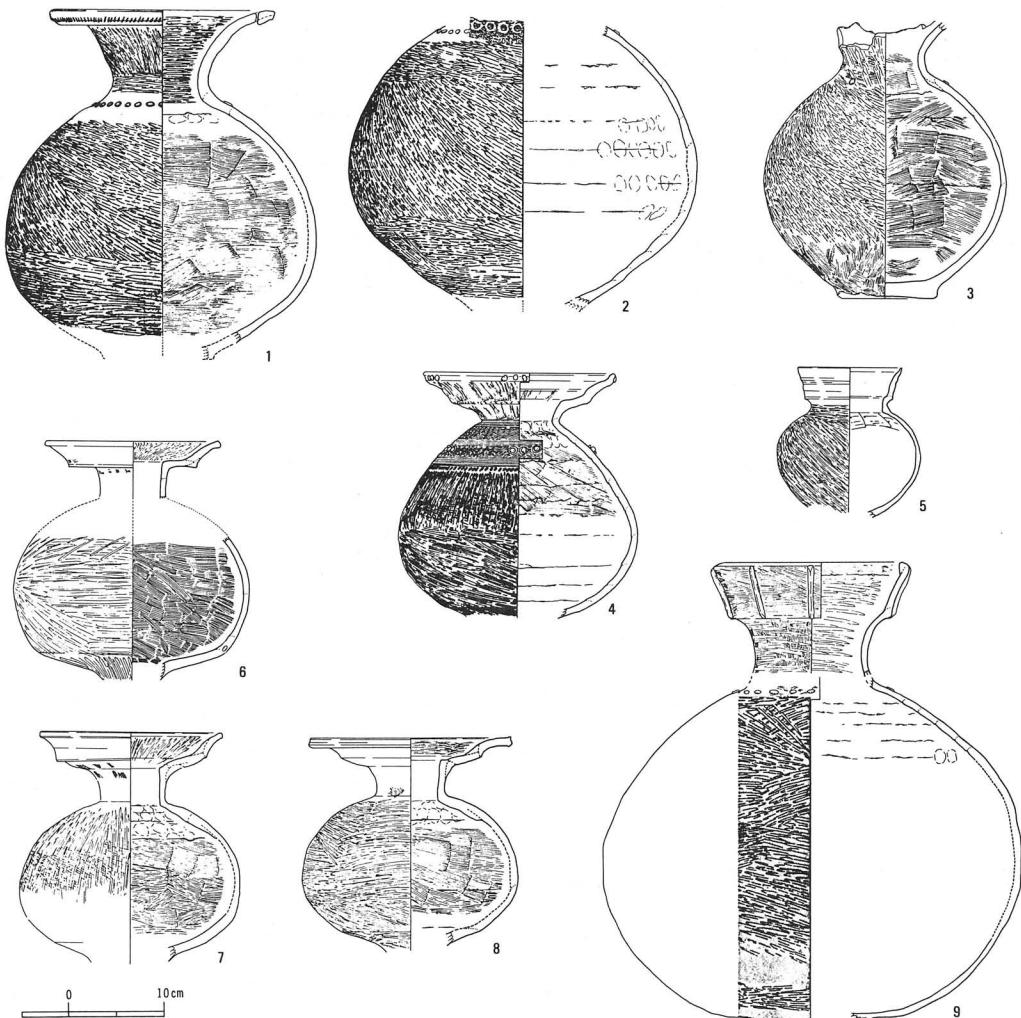
まず、東海西部系の土器群としては、S字甕の中でも古相をしめすA類が、韋崎市後田遺跡⁴⁰⁾、坂井南遺跡⁴¹⁾、櫛形町村前東A遺跡⁴²⁾、長田口遺跡⁴³⁾などで出土しており、県西部を流れる釜無川（富士川）流域に多く知られている（第5図）。この系譜上にあるS字甕C～D類は、次期の京原式期～西田式期において煮沸形態の約50%以上を占めるようになり、甲府盆地内においても定着化する煮沸形態である。この他、村前東A遺跡では廻間I期に対比される脚部が内湾した高坏や有稜高坏、ヒサゴ壺、鼓型器台などが一か所に集中して出土している（第5図）。該期の東海系土器群の動きを東山道に求める赤塚氏は、信濃地域から甲斐地域への流入を推定するが⁴⁴⁾、先述したようにこの前時期には東海地方の中・東部の土器群が盆地内へ持ち込まれていることから太平洋岸の地域からの搬入も現段階では否定できない。

また、富山西麓の西一条遺跡出土の畿内系のタタキ甕は共伴関係が明確ではないが、この前後の時期に搬入または模倣されたものと思われる⁴⁵⁾。

他方、北陸系土器については、月影II式あるいは漆4期の年代観が東海西部の欠山式や廻間

第5図 山梨県内の外来系土器の分布





第6図 上野遺跡1号方形周溝墓出土土器

I期に対比関係を持つとされ⁴⁶⁾、甲斐地域に直接これらの土器が搬入されたとすれば六科丘式期の土器群と伴出する可能性がある。該期での明確な共伴関係は現在までの資料では、S字甕A類と北陸系甕が出土した長田口遺跡4号住に唯一知られているのみである。姥塚遺跡85住の有透装飾器台や坂井南遺跡4号住の北陸系甕の出土状況から見ると次期の京原式期に伴出する例が多い。このことは、北陸系土器の甲斐への流入径路を考える上で示唆的といえる。

次に、古式土師器の成立段階とした京原式期では、S字甕や元屋敷並行の高坏、小型精製土器群、畿内系の二重口縁甕などの定着によって特徴づけられる。しかし、この中にあって身洗沢遺跡で出土したようなパレス甕や北陸系有透装飾器台、有段口縁甕、上野遺跡出土の北陸系甕（第3図10）などは客体として存在することはあっても該期の主要器種とはならない。

以上のように甲斐地域においても、該期の非在来系土器といわれるものには大枠として、主体的に受容され定着する土器群（在地化）と、搬入・模倣段階にとどまり定着しない土器群

(外来系)に分けられる。また、器種によってはふたつの系譜的な特徴をかねそなえた折衷形の土器や模倣・定着化の過程で要素の脱落や転換が選択的に行なわれている例もある。したがって、該期の外来系土器だけを抽出し過大に評価するのではなく、非在来系土器の受容と非受容をめぐっての分析を本地域においてさらに細かく検討していく必要がある。

上野遺跡1号方形周溝墓では、在来系壺に加えて東海東部(第6図9)、東海西部(第6図4)、畿内(第6図6~8)、北陸(第6図5)など幾つかの地域に系譜をもつ外来系壺が周溝内から出土している。この様な出土状況が当時の社会にあっていかなる意味を持つものかも、先の文化要素の選択的な採用と排除とともに今後の検討課題といえる。

5 まとめ

以上、身洗沢遺跡出土の外来系土師器5点について紹介し、その位置付けを行うために甲斐地域の弥生時代後期から古墳出現期の非在来系土器群の受容について若干の検討を加えてみた。しかし、最初にふれた外来系土器の第一の資料的評価にとどまり、第二の本質的な意味理解に立ち入ることができなかった。この点については、さらに資料の増加を待って再度検討を加えていきたい。

古墳出現期における非在来系土器の動態は、単なる文化的な影響という枠を超えた人の移動の問題が絶えず問題とされる。それは、前方後円墳などの定型化した古墳がどのような過程で畿内の周辺地域に登場するのかという政治、社会的な背景に連動した問題として捉えられているからである。とくに、東日本への前方後円墳に先立つ前方後方墳の出現、そして畿内系土器群に先行した東海西部系土器の流入に、当時畿内の勢力下にあった東海地方の人々の東国経営への動員を想定する研究者もおり¹⁰、この非在来系土器群の評価には各地域でより慎重な分析が必要とされる。

註

- 1) 比田井克仁 1985 「外来系土器群の展開—古墳時代前期の東京を中心として—」古代78・79号 pp14-39
- 2) 山梨県教育委員会 1987 『金の尾遺跡・無名墳（きつね塚）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第25集
- 3) 笹沢 浩 1987 「中部高地型の櫛描紋土器」『弥生時代の研究4 弥生土器II』pp112-118
- 4) 山梨県教育委員会 1987 『二之宮遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第23集
- 5) 荘崎市教育委員会 1988 『坂井南』
- 6) 山梨県埋蔵文化財センター 1990 「長田口遺跡」長田口遺跡調査速報
- 7) 三珠町教育委員会 1989 『上野遺跡』
- 8) 浅井和宏 1986 「<宮廷式土器>について」『欠山式とその前後』第3回東海埋蔵文化財研究会 pp318-336
- 9) 栃木県立博物館 1991 「土師器壺—パレス壺の系譜—」『古墳出現のなぞ—激動の世紀に迫る—』p175
- 10) 加納俊介 1987 「用語に関する二、三の問題」『欠山式とその前後 研究・報告編』第3回東海埋蔵文化財研究会 pp73-80
- 11) 花岡弘 1986 「土師器の成立と古墳時代—古代信濃の成立過程を語る—」『歴史手帳』14-2 pp46-55、金井汲次 1982 「安源寺遺跡」長野県史考古資料編（北・東信）pp222-233
- 12) 八王子市鶴田遺跡調査会 1981 『神谷原I』
- 13) 小川貴司 1983 「市原市南中台13号住居址」『三～四世紀の東国—揺れ動く謎の時代』八王子市郷土資料館 pp66-67
- 14) 野口静男 1989 「萩山遺跡」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報〔昭和63年度〕』栃木県教育委員会 p50、栃木県立博物館 1991 「萩山遺跡1号墓」『古墳出現のなぞ—激動の世紀に迫る—』 p160
- 15) 山梨県教育委員会 1987 『姥塚遺跡・姥塚無名墳』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第24集
- 16) 石川県埋蔵文化財センター 1985 『金沢市北安江遺跡』
- 17) 金沢市教育委員会 1986 『金沢市近岡ナカシマ遺跡』
- 18) 金沢市教育委員会 1981 『金沢市南新保D遺跡』
- 19) 石川県埋蔵文化財センター 1986 『漆町遺跡I』
- 20) 谷内尾晋司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』pp295-332
- 21) 田嶋明人 1986 「考察—漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡I』 石川県埋蔵文化財センター pp101-186
- 22) 註20)と同じ
- 23) 前掲註11) 花岡論文

- 24) 群馬県教育委員会 1990 『有馬遺跡Ⅱ 弥生・古墳時代編』
- 25) 前掲註13) と同じ
- 26) 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 1986 『大崎台遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 27) 註14) と同じ
- 28) 山川守男 1984 「北武藏児玉地域の古墳時代前期の様相」『第5回三県シンポジウム古墳出現期の地域性』pp117-139、小川貴司 1983 「美里村志渡川遺跡3号住居址」『三～四世紀の東国一搖れ動く謎の時代』八王子市郷土資料館 pp22-23
- 29) 中山誠二 1986 「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」『山梨考古学論集Ⅰ』山梨県考古学協会 pp205-237
- 30) 甲西町教育委員会 1981 『住吉遺跡-弥生時代集落址の調査』
- 31) 茅ヶ崎市 1980 『茅ヶ崎市史』3 考古民俗編、下町屋遺跡発掘調査団 1976 『下町屋における緊急調査の記録』
- 32) 藤沢市教育委員会 1971 『藤沢市文化財調査報告第七集-稻荷台地遺跡調査概要(2)-』
- 33) 中原上宿遺跡調査団 1981 『中原上宿』
- 34) 本郷遺跡調査団 1985 『海老名本郷(Ⅰ)』
- 35) 厚木市教育委員会 1983 『子の神(Ⅱ)』
- 36) 小川貴司 1985 『八王子市郷土資料館考古資料収蔵目録Ⅰ』八王子市郷土資料館
- 37) 白山遺跡調査団 1985 『鎌倉市津西白山遺跡』
- 38) 柳形町教育委員会・六科山遺跡調査団 1985 『六科丘遺跡』
- 39) 赤塚次郎 1986 「S字甕について」『次山式とその前後』第3回東海埋蔵文化財研究会 pp310-315
- 40) 荘崎市教育委員会 1989 『後田遺跡』
- 41) 註5) と同じ
- 42) 中山誠二 1991 「柳形町村前東A遺跡」『年報』7 山梨県埋蔵文化財センター
- 43) 長田口遺跡第1次調査4号住居址では、A類S字甕と北陸系甕が供伴して出土している。出月洋文氏の御教示による。
- 44) 赤塚次郎 1990 「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 pp50-109
- 45) 中山誠二 1985 「西一条遺跡」『上九一色村誌』 pp368-369
- 46) 前掲註44) と同じ
- 47) 高橋一夫 1985 「関東地方における非在地系土器出土の意義」『草加市史研究』4、同1988 「古墳出現期の諸問題」『物質文化』50 pp 1-6